

## 山口県萩市における地域資源の有効利用と道の駅萩しーまーと —地域振興と水産業—

山口県萩市は、2001年8月に、地域の水産物流通の拠点として道の駅萩しーまーとを開設した。萩しーまーとは、同年4月に旧萩市、旧阿武町、旧須佐町、旧田万川町の14漁協の市場統合に伴い新設された萩地方卸売市場に隣接して建てられており、「地産地消」の実践店舗かつ交流センターとして、観光客ではなく萩市民を主対象とする“道の駅”である。

萩市漁業の現状は、昭和50年代に盛んであったフグ延縄漁業が縮小したことから、フグ延縄の街から中型まき網やイカ釣漁業の街へと大きく変貌してきた。また、観光面では修学旅行を中心とした団体型から、中高年の萩の歴史を訪ねてといった個人型へと移行し、観光客数も大幅に減少させてきた。このような中で策定された萩しーまーとの開設を含む萩市の水産振興の基本的な考え方は、水産資源に限らない萩市で培われてきた人的資源や観光資源などの地域資源の活用と萩市民に支持される水産業の再構築であった。

行政が策定する水産振興策はともすると、水産関係者だけが納得する内輪のものになりがちであるが、萩市民が受け入れてくれるものでないと机上の空論となり、長期に耐えられるものではない。そのため、新たな振興計画のコンセプトは、萩市全体(自体)の地域振興に「萩の水産」を萩の資産として有効に使うことであり、なおかつ、その振興計画に対して各層の萩市民が「応援団」になってくれるものとするにであった。

本ミニシンポジウムでは、山口県萩市の萩しーまーとを核とした水産振興について、その現状と取り組み内容を明らかにしたうえで、第一に、地域産業の振興や町おこしの原点は、地域自体が持つ資源(人材も含めて)と資産(歴史的な遺跡など)に依拠しながら、地域が責任を持って取り組むという、いわゆる内発的発展論に依拠した地域の視点に立った水産振興の考え方とその実践方法、地域への波及効果について検討するとともに、第二にグローバルゼーション進展下における産地再編の課題と解決のための方策を明らかにすることを目的とする。

コーディネーター 三木奈都子・三輪千年(水産大学校)

解題 三輪千年 15:40-15:45 (5分)

第1報告:板倉信明(水産大学校) 15:45-16:05 (20分)

「萩市漁業の特質」

萩市漁業における近年の存立上の特質に関する検討を主要課題とする。その検討を通じて、当該漁業経営が地元水産物市場に求める役割について若干触れる。

第2報告：貞光一成（萩市農林水産部） 16:05-16:30（25分）

「萩市の水産業振興策と行政支援のあり方について」

萩市の主な水産業振興策の流れと、そのなかで行われてきた①萩の魚ブランド化の取り組み、②水産物の流通改善に係る取り組みと漁協合併、③萩しーまーと整備に至る経緯と人材の登用についてみていく。

第3報告：中澤さかな（道の駅萩しーまーと） 16:30-16:55（25分）

「道の駅萩しーまーとのポジショニングと役割」

歴史観光を行ってきた萩市で、漁獲魚種数が多い萩の漁業の特徴を活かした「食」観光の提案をすると同時に、市民に対しても地域資源を活用する食を提案する食のプロモーターとして機能してきている萩しーまーとのポジショニングと役割について検討する

第4報告：甫喜本憲（水産大学校） 16:55-17:15（20分）

「萩市の産地市場再編と萩しーまーとの関係」

萩エリアの水産物需給の変化を把握し、全国のなかでも早くに進んだ市場統合の動きとその効果について検討するとともに、そのような状況下で果たした市場に直結した直販施設である萩しーまーとの流通面での機能について検討する。

コメント：副島久実（水産大学校） 17:15-17:25（10分）

従来型の道の駅と異なる萩しーまーとの水産物流通面での特徴を指摘し、産地の水産物流通再編の視点から萩市の事例を評価する。

休憩 17:25-17:30（5分）

質疑応答 17:30-18:10（40分）